

HAMLET と LEAR

——悲劇世界の成立（その二）——

丸 田 敬

前に *Romeo* では愛という人間行動の意義が劇に対して *a priori* に存在しており、そういうような外的な統一上の枠として何かの価値が機能する姿は *Hamlet* 辺りから消失していると言ったが⁽¹⁾ これは愛の現われ方について確かに云えることだと思う。

Shakespeare の女性是一般に何か stiff なところがある。何となく flat である。ということは、劇を経験し変容する主体であるよりも主人公に対する動作因の一つとして一定の意義と視点を与えられて登場するように思えるのである。Juliet は主役ではなくて、闇夜の導きの星である。Gertrude も Ophelia も “Frailty” であることに専心しているとしか思えない。Desdemona は只管愛を捧げるのみである。それは捧げるという動作としてではなく、捧げる姿勢の持つ美として働く。⁽²⁾ Cordelia, Goneril 等のアレゴリカルな意味は明瞭であり、又、中期以後の喜劇及びロマンス劇の中で女性像が劇の光栄に資する役割は重要なものである。⁽³⁾ 少なくとも此等の女性の flat な一面は、男性に当然相伴わねばならないという必然性を介して、男性である主人公の行動する広義の setting の一部となつて価値の問題に関係して来るように思われる。

Romeo は両家の争いやなすことの行き違い等の論理以前の無情な運命に邪魔された挙句亡びるのだが、この哀れな男を支えているのは彼の Juliet によつて開眼された愛である。Romeo を中心にして愛と運命の斗争が行われている。形式的には Juliet についても同じことが言えるように見えるが、実は彼女は Romeo を愛した瞬間から運命を超越した存在になつている。従兄の不慮の死その他の不都合は、得体の知れぬ現実として彼女の精神に組み入れられるのではなく、単にその不都合さとの対比で Romeo への愛を確認する契機となつ

ている。

But wherefore, villain, didst thou kill my cousin ?
That villain cousin would have killed my husband.
Back, foolish tears, back to your native spring !
Your tributary drops belong to woe
Which you, mistaking, offer up to joy.

[*Romeo* 3. 2. 100~4]

そしてその長い白の最後の “no words can that woe sound.” を

But I, a maid, die maiden-widowéd.
Come, cords; come, Nurse: I'll to my wedding bed,
And death, not Romeo, take my maidenhead !

[*Romeo* 3. 2. 135~7]

と結合して見る時に

How hast thou the heart,
Being a divine, a ghostly confessor,
A sin-absolver, and my friend professed,
To mangle me with that word ‘banishéd’ ?

[*Romeo* 3. 3. 50~2]

に示される Romeo の抗議がより広い視野の可能性を持つているのを否定できない。Juliet の清純さは両親の政略や乳母の変節に対置されて華々しく顕在化され、彼女は自己劇化の必要を全く感じない。彼女が愛において、Romeo をリードするのはその結果であつて、こういう単純な性格とは言葉を交す方が負けである。Romeo は弱さと愚かしさを与えられていて、運命の無情に空しく反抗しつつ、Juliet に惹かれて行く。で、一般に悲劇の中核をなすところの aspiration と fall の相反のテーマは Romeo では幾分の展開を見せるが Juliet にとつては人間の係わる運命ではなく大局的に「運命」として自己の世界の外に出される。この結果 Romeo にも運命を圧倒する力を与えるのであつて、これは後のロマンス劇における女性と著しく似ているだけでなく、悪の横行する悲劇にも異つた意味ではあるが略一貫した態度がある。

一般に主人公が愛の在不在を識るのは女性を通してである。極めて平凡なことのようであるが、この時女性は実は「女性」を表現し認識は一方交通となる。恋人の不貞を目のあたりに見る Troilus の「あれは Cressida であつて Cressida でない」という有名な場も、女が男性としての主人公に対する「意義」として扱われているのを示す。Cressida という尻軽女を嘲弄しよ

うとする satirical な精神はそこに自ら捲き込まれて、自分を失いかけている。
“Was Cressid here?” に対して “I cannot conjure, Trojan.” と答え、

what hath she done, prince, that can soil our mothers ?

[Troilus 5. 2. 134]

May worthy Troilus be half attach'd

With that which here his passion doth express? [Troilus 5. 2. 161~2]

O, contain yourself :

Your passion draws ears hither. [Troilus 5. 2. 180~1]

と口をはさむ Ulysses は、その表面上の反論の底に Troilus の言葉の moralistic な内包に対する正当な理解と 同情を含んでいて、そこを無理に割りきろうとすると Thersites の没価値的態度になる。⁽⁴⁾

D. Wilson はことさらに Hamlet は王位を不当に奪われている王子なのだ、と叫んだが⁽⁵⁾ これは劇の仕組み、プロットの糸の支点を明確にしたのであつて、本来間違いようのないことであり、余り強調しても不都合な筈である。元来の復讐物語りに、母や恋人の愛の問題が加重されて新鮮な作品となつている意味では *Hamlet* は復讐という言葉を支える倫理上の構造内に終始するものではなく⁽⁶⁾ Hamlet は Troilus と同じく愛の在不在を問うて得た否定的な答に満足できない人物なのである。満足できる解答がないという重要な事実は王位を狙う王子として Hamlet を規定する方向とは殆んど逆のものである。母の父に対する、Ophelia の自分に、自分の Ophelia に対する愛に疑問を發する彼は、自分の感受性と外界とが相照応する構造を持たないので安住する場所が無い。

Juliet が「女性」として男性に関して持つていた積極的な意義は Cressida で消滅し、Gertrude や Ophelia はすでに悪の運び手となつている。彼等の Hamlet を想う誠実さに眩惑されて、彼等に対する Hamlet の態度を非難するのは恐らく作者の意のある所ではない。彼等は悪の影を負つた frailty として彼の前におかれる。それは Gertrude や Ophelia の個々の性格や罪ではなく、ある個人に対する情愛の程度の問題でもなく、彼等の全存在が Hamlet を裏切るという問題なのである。このように捉えられた悲劇には脱出口が無い。Troilus も Hamlet も一応潔白な存在として透明な視力——知性——を与えられている。我が身の汚れに言及しはするが “I am myself indifferent

honest.” [*Hamlet* 3.1.123~4] はたとえ確信ではなくても存在理由なのであつて、彼等は批判する態度を失うことができない。

人の世の矛盾は事実そのものだから、何等の行為のきつかけにもならない。この不毛地帯から *Troilus* や *Hamlet* を救つて行為へ促すために「名誉」の観念が先ず現われる。しかし「名誉」の全一性がすでに疑わしいので、そこに *Troilus* や *Hamlet* のトートロジイが結果する。⁽⁷⁾ *Troilus* の含む悲劇的認識は元来 *Troy* の確実な運命の背景の上で成立しているにもかかわらず、王子は斜陽を浴びたまま引き揚げて行く。その所を *Hamlet* は神の摂理で説明しようとする。

but heaven hath pleased it so,
To punish me with this and this with me,
That I must be their scourge and minister. [*Hamlet* 3. 4. 173—5]

完全なトートロジイである。

恐らく *Hamlet* の regeneration の可能性はこの哲学にではなく *Laertes* への謝罪に含まれている。

If *Hamlet* from himself be ta'en away,
And when he's not himself does wrong *Laertes*,
Then *Hamlet* does it not, *Hamlet* denies it.
Who does it, then ? His madness : if't be so,
Hamlet is of the faction that is wrong' d ;
His madness is poor *Hamlet*'s enemy.

[*Hamlet* 5.2.232~7]

Ophelia の墓で *Laertes* とつかみ合いをした *Hamlet* とこれは又何と唐突な相違であるか。この変化を正当化する事件に我々は出会っていないので、上の言葉は苦しまぎれのものに聞えるうらみがあり⁽⁸⁾ その為に “The rest is silence.” という名文句も悲しく聞える。これ以上生きていても、彼は *Claudius* にこびた廷臣達に伝える言葉は持たないのだ。⁽⁹⁾ にも拘らず、上に引用した言葉には *madness* を自己から分離して自己を縮小再生産する過程があり、自己主張の裏に自己認識がある。神の摂理という出来合いの逃げ道を除けばこれが *Hamlet* がもつと深く掘り下げるべきだつた道ではないだろうか？

Othello は *Iago* の暗い力の前に屈して怖るべき嫉妬から *Desdemona* を殺してしまうが、同じく自分の力に負えない運命に殺される *Ophelia* がも少し

個性的な女であつたならと批判され勝ちなようには、Desdemona には非難の余地なく見えるのは何故か？

彼女は再び Juliet を想起させるが、より彫刻的で static である。Juliet がその息吹で Romeo を支配したようには Desdemona は Othello の世界に入り込んでいない。Juliet は運命を超越していると言つたが Desdemona も愛することしか知らない点では運命の外に立つ。しかし Romeo で運命が愛と対立したのに対し、Iago は愛を annihilate する意志である。Iago と Othello が Desdemona の前で争つているのであつて Desdemona と Iago が Othello を争うのではない。そこで彼女の static な印象が生れる。

Ophelia に対する Hamlet の態度は、彼女に彼が何を欲しているかを悟る力が彼女に無い事から生ずる。つまり Ophelia は Hamlet の喪つた愛の否定的な表現である。従つて彼女は無いものねだりをされているわけで、何も理解せぬままに、運命に奔弄されているということも良く解らぬまま死んでしまう。運命に対して Juliet も Ophelia も Desdemona も大変良く似た關係に立っている。皆局外者である。それは愛の構造を解くのが作者の目的ではなかつたことを意味しないだろうか？ 眼はより愛の位置に注がれていたように思われる。本来男女の關係でありそれ自体劇的であるべき愛が女性像に意義化されている。Desdemona は劇の locality を示す点である。Cassio に名誉回復させようとする願いが Othello に誤解されるのも Desdemona に関してはドラマにならない。そして真実を知つた Othello は彼女を人生としてではなく宝として実感する。Othello の敗北、彼の自殺は、彼の人生にのみかかわるのだ。

Othello は喪失感を以て宝の価値を量る。Iago の罪はいつか露われるものかも知れないが Desdemona は歸つて来ない。Claudius の良心を通してその悪を暴く行為が、世の無残に心暗い Hamlet のその心暗さを救えないのと一般である。⁽¹⁰⁾ 漠然と我々が存在を信じている良心とか摂理とかは案外そのままでは役に立たぬものではないのか？ 祈つて見た時 Claudius が一番それを痛切に感じた筈である。

Othello の氣高さが如何なるものであるにせよ、それは Desdemona なしに

は、つまり彼女が無条件に印象する愛の価値に支えられなければ成立しない。しかし彼女の愛は悲劇的事態の外に造形されて存在せしめられた反面 Othello の死活への関与をぎせいにしている。Othello の美德も否定的にしか発想されない。Hamlet は Othello が死んだ所から考え始めたのでとも角考える人間を表現したが、Othello の美しさはデカダンスと紙一重のものだと思う。

これがデカダンスでないのは作者のモラリスティックな発想による。この発想は歴史的なもので、恐らく Neo-Platonism を育てた思考法と血縁のものである。物を視る際に規定する言葉の供給源としての良い意味の convention である。歴史に位置付けられた人間に convention の良し悪しを言つても始まらない。Shakespeare の何よりの偉大さは宇宙の調和という究極的には楽天的な観念を探り求めて現実を容赦なく眺めた所にあると思う。それが歴史の手柄か個人の手柄かどつちでも良い。

さてこのいわば中世的メカニズムは非常に正確な価値尺度を要求するので Hamlet が苦しむ。逆に神から遠ざかつて了う。「悪夢」は神の世界の裏側なのである。何故そんな所に落ちこんだのか誰にも解らない。しかしこの断層を再びはい上るのは不可能なのである。神もあえて見ないものを見た人間には。近代は中世的思考が両刃の剣という危険なものになつたその劇の中から生れたのだろうか。Hamlet の近代性が云々される為には、中世的な価値への献身ということが理解されなくてはならないように思う。その上で Hamlet と Edmund の関係も判然とするとする。

天の臥床に飽きてごみためを漁る母の姿は Hamlet には、あやまち以上のものと見えた。叔父を討ち母を改心させるのが役目の勇士は Hamlet のように目が昏む必要はない。天国か地獄かなら簡単なことだ。そのけじめが判らないのが混沌である。Hamlet は己れの moral sensibility を用いて混沌を表現しようとする。

中世の法則は先ず hierarchy への従属であつた。天の理法からの逸脱は先ず個の主張として七つの大罪の筆頭におかれた。理法との対比では個は必然的に情念乃至欲望の姿を取る。Pride に続く面々である。

雑草が生え放題の世界は制御を失つて無意味となつているのだが、異様な汚

れた生殖力に対する恐怖と嫌悪感がみなぎっている。Gertrude は悔い改めた女となると同時に、打ちひしがれた女となる。Claudius 同様彼女も卑小化された情念であり続け、神に余り近付いたようには思えない。

中世アレゴリーの世界では、人間は一切の価値の創作から免れている。信仰ということの如何なる困難さにも拘らず、個を脱して Everyman と化した人間は、プラスとマイナスの観念の中を、神の掟に従つて選んで行けば良いのである。パターンが完全なので人間は自己を滅すれば宇宙的な統制力に合することができる。

ギリシャ悲劇にあつてはパターンはより人間的である。

我々の意識は生と死の斗争を四六時中斗うことに堪えられない。安易化する傾向と reality を畏れる心とは相反する。英雄とか崇高な人物は、弱さをカバーする小ざえのきかない人物であつて、日常論理の及ばぬ所に投げ出されるいけにえの性質を持つている。主人公の論理がどこかで打ち碎かれる。この打ち碎かれるという人間行為がなくては、reality も啓示されない。打ち碎く力が因果とされるか神格化されるかの相違はあるが、パターンは同じであるように思う。我々は悲劇の流れが、また我々自身の血液の流れであることを感じる。そこに民族の英雄が現われるのである。これが恐らく神話的認識の基本なのではないか。我々は主人公の失敗や没落を覚悟している。突然現われる新奇に目を見張るのではなく、生命の二重構造の矛盾を確認する瞬間を待つている。

こういう悲劇では人間と外力は不分明である。人間を自然の部分としておこうとする根強い願望がある。これに対しキリスト教的思考は、神の樂園と人間の間には原罪を設定する。すでに一度劇が終つている。前者では人間の劇は宇宙の悲劇的壮大さに拡大する可能性があるが、後者では神の意志しかない。人間は情念という独立的自己肯定性と信仰という自己否定性に分裂する。自己肯定こそ Lucifer の没落の原因であつた。desire と restraint, pride と humility は同じ対立の異なる表現である。この否定的な人間認識は同時に情念を捨てた者に永遠の生命なる無限に明るい約束を与える。

母の引き裂かれた心について

O, throw away the worser part of it,
And live the purer with the other half.

[Hamlet 3. 4. 157~8]

と言う Hamlet は情念を捨てることの肯定的意義を信じている。しかし一方では秩序の破れが示すものは、破れは破れに過ぎないという単純なことではなくなっている。たかぶりに自己を失った時には Hamlet はまた

Let the bloat king tempt you again to bed;
Pinch wanton on your cheek; call you his mouse;
〔Hamlet 3. 4. 183~4〕

と叫んでしまう。そして

For who, that's but a queen, fair, sober, wise,
Would from a paddock, from a bat, a gib,
Such dear concernings hide?
〔Hamlet 3. 4. 189~91〕

は Hamlet の意図にも拘らず、美と信仰とが策略の平面に引き下されて泥にまみれているのを示す。

従つて Gertrude の改心は、混沌を示す為に羅列される多くの事件と同列に引きずり込まれる。彼女の中に救われる部分を取り立てて残らない。

中世的社會秩序からはみ出す自己の認識はこの相反する二つの傾向を同時に生み出す。moral sensibility は moral order の存在とそれからのそ外とを認識させる。Polonius が卑俗化し Claudius が策謀家と化し Laertes が刃に毒を仕込む時 Hamlet の「天の配剤」説は悲鳴に近い。彼等に対立すると同時に彼等を含む彼もまた卑小化するからである。Hamlet は stoic になつて行く believer であると思う。神への humility が同時に stoic な態度でなくてはならぬところに特色がある。

stoicism が謳われているというのではない。その事情は Horatio に明らかかなようである。彼は「忍ぶ」ことを学んだ哲学者であるが、そこに至るまでに彼が経た劇は無視されている。又 Hamlet の劇からも無視されている。「進むべきか、忍ぶべきか」と Hamlet は自問したが、結局彼はどちらをも択ばなかつた。逆に「進むか忍ぶか」に表わされる困難さを択んだというべきだろうか。土壇場まで決めかねた男の悲劇と言うことさえできよう。断層の深みを探るこの意志を優柔不断と間違えてはならない。事をなす能力を作者は Hamlet に与えた。果断で剣も強い性質を。それは Ophelia が良く知っている。それを疑つては作品は成立しないのである。

Hamlet は復讐を自分で定義しようとした。その人間的社会的諸条件に立ち戻らなくてはならなかつた。だが秩序とは単一の梯子ではなくて、一旦疑問を發したら無数の迷路に迷い込まねばならない複雑な構造物である。彼は結局足を取られた。誤解を恐れずに言えば、彼の最後の madness 論は、そんな事を試みると足を取られるだけだというモラルである。

反対に神の国からの追放を以て自分の新生活の始めとしたらどうだろう。神の秩序との調和を無視すれば、混沌にも法則があることになる。この意味で Lear の Edmund は Hamlet が敢えて追求しなかつた半身である。彼は Gloucester 伯の hierarchy からそ外された庶子である。嫡出子には庶子の存在は解らない。だが庶子にも言い分がある。庶子是不義の子である。不義を旗印とすべきである。欲望の nature が彼の女神だ。Hamlet の嫌悪を持たないだけで、同じものを見ているのである。

Edmund の武器は、自らの犯した過誤を理解できない父達に対する嘲笑である。ここに彼の強みと限界がある。彼は旧世界に抵抗することで方向性を持つ。彼の「女神」と彼自身はなれあいであつて、その関係が人間の運命を包容するには至らない。従つて彼の論理の力が父達の実生活を破壊する半面父達の愚かさが何故愚かさであつたかの根本因まで進めない。神々がはえの如く人間を殺すという認識と、欲望が我が女神だという認識は余り異つたものではない。

moral sensibility は Gloucester を断罪すると共に Edmund をも断罪したいのである。しかし前述した Edmund の cause は論理的なものである。この背反は二つの異なる視点を一つにまとめようとする無理から生ずるので Hamlet の苦悩と全く同じである。これは Edgar と Edmund の一騎打ちという騎士道的理念の助けをかりて一応解決される。が Edgar の勝利は必ずしも秩序の完全性の回復感を与えない。⁽¹¹⁾ 縦に律せられた劇であるよりも、横に広い劇である印象は必竟この統合力の不完全から来る。神の樂園のあとに残る Edgar の世界はまあ civility⁽¹²⁾ の世界とでも言うのだろうが Edmund 物語りからの論理的帰結ではない。

調和の世界に結びついた Hamlet の半身の延長にあるのが Lear 王である。彼は旧秩序の意義を没落と共に演ずる。Goneril と Regan は Edmund と

同じ世界にいるが、彼が論理を追うのに対して、彼等はやはり flat な性格である。Edmund には悲劇性があるが Goneril と Regan はどこまでも暗い存在である。彼等がどうして墮落したのかは無視されている。Troilus が Cressida の不貞に対したように Lear も娘等の不孝を表現する言葉を持たない。全く無力である。待つだけである。待つのは信ずることである。けれども裏切られる。Lear は亡びなくてはならない。Cordelia の死の衝撃に絶息する時彼は何か信ずるものに縋つて死んで行くのではない。永遠の生命などというお仕着せは存在しない。Horatio が古ローマの武人らしく自殺しようとするのと同様、Kent も王のお供をする積りである。stoic なものがそこにある。しかし王も Cordelia も stoic ではない。セネカ流の自己の雄弁的発現の stoicism は何か別のものに変つている。或は stoicism と並んで別の可能性が暗示されている。⁽¹³⁾

それは忍容の精神である。Hamlet も Lear も復讐の世界に相對して狂気する。洞穴で只管に娘達の正しい裁きを要求する Lear は、誰が裁きを要求する権利があるのかと問い始める。王から愚かな赤ン坊である老人になつた自分の姿を直視する時 Lear は hierarchy の桎梏を脱することができる。国土を守る役目は他の者が代つて呉れているので Lear は世捨人になるのである。Timon も世捨人だつたが彼は世間に背を向けた。Lear は

So we'll live,
And pray, and sing, and tell old tales, and laugh
At gilded butterflies, and hear poor rogues
Talk of court news; and we'll talk with them too
Who loses and who wins, who's in, who's out
And take upon's the mystery of things,
As if we were God's spies;

[Lear 5. 3. 11~7]

の境地で、ついに Timon のものでなかつた平安を得る。和解そのものが重要なのではなく、あの傷つき破れた老人の中に、これ程の変容を可能とする認識力が残つていたのが奇蹟的なのである。

調和の国からの Lear の追放は一時的相對的なものではない。復権を予定した追放ではない。ここの認識を間違えると、幸福な Lear を登場させようとする改作が可能になる。栄光の日は去つたのだ。Lear を市井の一人間と見るか

ら悲運が不当であるように見える。一旦消失した過去の中に 帰す方が更に不当なのである。Lear の運命に当不当を云々するのは不可能なのである。Lear は娘達によつて喪われた燈を再び点じる意味で再生するのではない。Lear は方程式ではなく劇なのだ。神の摂理とかアレゴリカルな価値とかにではなく、自己に捧げられた ritual なのだ。方程式は不完全である。⁽¹⁴⁾

Stoicism でもなく Christianity でもないものがここにある。それは Cordelia でも証明されるだろう。「二人が破滅させた世界をあがなう娘」と彼女は呼ばれる。「二人」は Adam と Eve だと Danby⁽¹⁵⁾ は断定している。Cordelia は Goneril, Regan との対比で存在するのであるから、この断定は無理である。そうではなくて、原罪にまつわる神話の記憶が同時に暗示されているだけである。

Hamlet にとつて女性 は Gertrude のようなものであつた。Troilus にとつては Cressida そして Othello には Desdemona があつた。Gertrude は Hamlet の愛肯定の願望を否定的に表現した。Desdemona は肯定否定の間われない場所に位置している。Ophelia は僅かに肯定的なものを持つているがエピソード以上に出ない。この女性像は Hamlet が Lear と Edmund に分裂すると同時に Cordelia と Goneril 等とに分裂すると考えられる。女性が凡ゆる意味を決定するというのではなく、女性が Hamlet に対して持つていた意義に絞つて考えると Edmund の「女神」は必竟 Goneril 等なのであり Lear の moral order を飾るのは Cordelia なのである。Juliet が運命を無視し、Desdemona も亦愛と悪との斗いの外に立たねばならなかつた事情は Lear にも引き継がれ Goneril, Regan が己れの性質と運命とを合致させる術がないのと同様 Cordelia の輝く美しさも現実の秩序の表現にはならない。Goneril 等の運命が中世アレゴリーの話を一歩も出ていないのと同様 Cordelia も Lear の悲慘に対立する新しい力ではないように思う。そんなわけで彼女にたとえ救い主の期待が寄せられていても、現実には Lear の悲慘の一部なのである。

プロットの形から言えば、一人残らず死んで了う Hamlet の結末が Lear ではそれぞれの死に方がもつと詳しく指示されている。Hamlet は “wounded

name”を通してこの世に未練を残して死んだが *Lear* ではこの未練は Edgar に充足化される。Hamlet の未練が彼とこの世を結ぶ僅かなきつなであつたように Edgar もまた大きな劇的勢力ではなく、*Hamlet* の構成は殆んど重大な変更を加えずに持ち越されている。名誉とは空気だと Falstaff が喝破して以来 Hamlet にとって名誉は十全の指標ではなくなつた。多くのものがはみ出したが *Troilus* でこのはみ出しの意味を最も痛切に死によつて感じたのは Hector である。Hamlet は名誉としての自分が outsider であると感じていた。それで和解の新しい原理を madness は自分の敵だという見解に託したのである。王座から退き、只の老人として始めなくてはならなくなつて *Lear* は名誉を捨て去ることができた。権威の飾りとしての名誉を。

Hamlet と Guildenstern 等は問答する。学友達の意図は Hamlet の ambition を暴いて Claudius を安泰にすることであるが、これは兄を殺して王冠を得た Claudius の批判ともなるのであつて、王位を奪い合う劇そのものの意味を滑稽化する。

Rosencrantz. I hold ambition of so airy and light a quality that it is but a shadow's shadow.

Hamlet. Then are our beggars bodies, and our monarchs and outstretched heroes the beggars' shadows.

[*Hamlet* 2. 2. 264~7]

Rosencrantz は ambitious な男ではないから、野心を「影の影」とさげすむ。この論理の正当さと、この正当さを喜ぶ卑小さの組み合わせが Hamlet には我慢できない。この世にいるのは outstretched hero と beggar だけだ。monarch は元来無である乞食が夢の影をまとつた姿にすぎない。Hamlet はここで止めている。body の着実さと beggar の貧しさとをどう調和させるかは触れられていない。

Lear は突然 beggar の境涯に投げ出されて、beggarこそ body であると悟る。悟りと一口に云つても禅の悟りとは異つてショックと共にある悟りである。

Is man no more than this ?

[*Lear* 3. 4. 103]

これが *Lear* の狂気の実体なのである。

彼は洞穴で娘達に対する正義の裁きを幻想するが justice は求めてはならな

いものだ。justice が無いと憤ることも、それを自分の手に握ろうとするのと同じく pride なのだ。此の点で Lear は Edmund を超越する。

上のような思考過程が、繰り返し襲つて来る絶望と悲痛と交互に現われ、怖るべき運命の下での Lear の精神の capability を形成する。その認識の意義は、我々が Lear の包容力に奇蹟すら感じるようにし向けられることの中にある。

Lear は stoicism が濃厚と言われる。Lear があく迄もあの運命に受身に終始し、作者もそこに手心を加えないからであろう。しかし stoicism は運命を無視する壁としての自己感覚を中核とするもので、自己という壁の裏側は不問である。Hamlet に stoical な姿勢が見えるのは、その向う側について問いかける構えを捨てる時である。その時の行動の指針には「攻めて悪を亡ぼすか」[自己の秩序の定着]「忍んでいるか」[秩序の不在へのあきらめ]の二つしか無い。Lear は第三の道、善と悪との完璧な構造を人間に求めない方向 folly を認める道を取る。folly への攻撃から satire が生れ、それが深刻化したのが Hamlet であるとすれば Lear にはその方向の不毛性の洞察がある。Timon は呪詛する事で生きていて、友情と寛容は裏切られた姿のままである。その為その友情と寛容を備え得た人間性の不思議さが積極的に肯定されない。Lear は運命が彼に此の世で何をしたかを段々忘れて了う。裏切られた姿ではなく、素朴な姿の人間性が現われて来る。彼は力んでいない。

勿論プロット自体は stoic な態度でもなければ発想できそうにもないものである。しかしこと Lear に関してだけは stoicism を更に越えた認識の劇が完成されていると思う。そこでは stoicism がすでに形式としてのみ用いられるというような。

全く実生活においては Lear は辛うじて立つているだけに過ぎない。folly を認めるという他愛もない解決を持つに過ぎない。だがそれは我々と Lear との接触の中で dramatic に認識される。それは stoic な姿勢の中でそれを凌駕する劇作法が生れているということではないだろうか。

Hamlet の分身である Edmund は次のように死を迎える。

Edgar : The gods are just, and of our pleasant vices
Make instruments to plague us :

The dark and vicious place where thee he got
Cost him his eyes.

Edm. Thou'st spoken right, 'tis true;
The wheel is come full circle; I am here.

[*Lear* 5. 3. 169~74]

これは美事な stoicism である。⁽¹⁶⁾ しかし Goneril と Regan の死体を前に
頻死の彼は自分の ancestry をはしなくも露わす。

Yet Edmund was beloved :

[*Lear* 5. 3. 238]

Ophelia の前に乱れた様子で Hamlet は何を求めたのであつたろう。しかし
Goneril や Regan を見る作者の冷く厳しい態度がある。決して自己憐憫を許
さない精神がある。その暗黒と慰めの間に僅かに Edmund は云う。

I pant for life. Some good I mean to do,
Despite of mine own nature.

[*Lear* 5. 3. 242~3]

Capt. Edmund is dead, my lord.
Alb. That's but a trifle here.

[*Lear* 5. 3. 295~6]

Albany の傍にまだ永らえている Lear がいた。Albany には政治があつ
た。しかし新しい政治が生れる為には、も一つそれは Lear の死を経験せねば
ならない。Edmund がことごとく裏切られると共に Cordelia と Lear が死
に致らしめられることを Albany は未だ知らない。

Thou'lt come no more,
Never, never, never, never, never !

[*Lear* 5. 3. 307~8]

古い言葉が失われるのである。

Speak what we feel, not what we ought to say

[*Lear* 5. 3. 324]

Shakespeare は残された政治家にそう言わせた。

Horatio はもういない。Fortinbrass も戻らない。Hamlet は死んでいる。
そして我々は Hamlet の劇が、生きている人間の劇であつた事に気付く。自己
劇化ということに秘む ritualistic な意味に気付く。

中世の価値体系は結局万能ではなかつたと歴史が教えている。けれども O-
phelia に空しく託されたものが Desdemona に、そして Cordelia に現在化

された祕密を歴史は教えはしない。一人の人間の生き方は価値体系に準ずることではなくて、それを素材として、自己の人生の中から体系を抽象させることなのだということを Shakespeare のその後の courtly な進行⁽¹⁷⁾ が物語っている。それも歴史は教えない。(未了)

[1962. 1. 10]

註 ① 拙稿「*Hamlet* から *Macbeth* へ」(「文芸と思想」福岡女子大学文学部紀要 1961. 号)

② Desdemona は欺され易く弱いと言われることがある。Othello と結婚した彼女は弱くない。愛について彼女の態度は不変である。その他の事は恐ろしく解らないのだ。

③ Juliet→Ophelia→Desdemona のそれぞれの相違とその間の認識の変化を持ち乍ら、なお *Lear* 的な認識の試練を経て、その成果を体現する女性が、上の系列上に創造される。*Pericles* の Marina, *Tempest* の Miranda 等である。これについては又稿を別にする機会があると思う。

④ Ulysses が Troilus を嘲弄しているとは考えられない。両者共 moral order の背理に直面している。この共通の立場で Troilus は若く Ulysses は経験者なのである。

⑤ D. Wilson ; *What happens in Hamlet* (Cambridge, 1960.) P. 34

⑥ 復讐別か否かを問うことは、復讐という言葉に盛られている意義で以て、その作品を少くとも一面的にせよ割り切ることができるかどうかにかかるのであり、復讐の定義、つまりは復讐の成立する order を規定しなくては無意味である。復讐が全く、conventional な内容のままに使用されている例は Kyd の *The Spanish Tragedy* であつて、その為この作品は完全さを保持している。しかし復讐と order との間の劇に我々を捲きこまないで、メロドラマ的二流の情緒を伝えるのみである。その order を改めて規定する必要に迫られた *Hamlet* を復讐劇かどうかと問うのは、物の核心を外すおそれがある。

⑦ 名誉は社会集団によつて共有される価値基準から生まれる。それが如何に個人的な動機から発生するよう見えようとも、それは観客を含めた行為の受け取り手の支持の上に成立する。*Troilus* でも *Hamlet* でも我々の共感は分裂させられている。

⑧ *Hamlet* が 'madness' によつて意味するのは彼のそれ迄の生き方全部に対する批評でなければならない。しかし 'madness' は又彼の sanity と共に彼を二分した所のものとして受取られるであろうことを予期している。言葉の遊びを得意とする一面から抜けていない。

- ⑨ Horatio はその為に生き残ることになつてはいるのだが、彼の conventional な解説の不十全さは Hamlet の劇が何よりもメロドラマ的構成を可能とするところの無条件な繰り返しへの不信に発しているのを物語る。その繰り返しは Horatio の言葉としてそこにあることによつて Hamlet の死のブランクを感じさせる。
- ⑩ 喪失の感覚は実感であるが、存在の思い出でしかない。又、良心で王を試すことを考えつく時 Hamlet は良心について考えているわけではない。order の回復に対する良心の役割を探っているわけではない。
- ⑪ Hamlet が Laertes に勝つのもそれが願わしいからである。しかしとつてつけた感じは覆えない。
- ⑫ L. G. Salinger : “The Social Setting”, *The Age of Shakespeare* ed. by Boris Ford (A Pelican Book, 1956) がエリザベス朝の精神史に用いている言葉を援用した。Shakespeare の発展と civility の意味とについての考察は今後に残っている。
- ⑬ Cordelia の flat さは何よりも人間的な自己意識を持たないで済んでいる所から来ると思う。彼女はいわば劇の stoic な流れにおいて Lear に相伴うと言うべきであつて、彼女自身は個体としての態度を持たない。尤も idea の spokesman である特性が一般に Shakespeare の女性に共通であることは繰り返し述べた。
- ⑭ ここで更に方程式の完全さを人間理性の中に認めると中世的世界になると思う。その時 ritual は劇を失うのではないか。更に考えて見たい。
- ⑮ J. F. Danby : *Shakespeare's Doctrine of Nature* (Faber & Faber, London, 1958). p. 125.
- ⑯ Cf. Henri Fluchère : *Shakespeare and the Elizabethans*. (Hill and Wang, Inc. New York, 1960) p. 56.

“The stoic attitude to suffering and death is the only one that can save the criminal hero, ill dealt with by destiny, from an ignominious end.”

但 ‘the criminal hero’ は *Hamlet* 以来内在的に否定的な態度として一主人公のみでなく複数の人物達の影を作つていていると思う。

- ⑰ Edmund において Danby の言う所の ‘New Man’ を裁いた Shakespeare は enterprising spirit よりも王侯的寛容さを重視する方向に向う。

(Shakespeare の引用は The New Shakespeare によつた。)